

近隣のアジア諸国との関係がますます密接になる昨今、日本がアジアをどのように認識しているかが問題にされています。「認識」は一朝一夕にしてできるものではなく、歴史的経験の積み重ねのうえに形成されてくるものです。今回のセミナーでは、日本が厳しい国際環境の中に船出しようとする前夜、言い換えれば日本がアジアと向き合う出発点とも言える時期（19世紀前半）に焦点をあてました。当時海外情勢に関する情報に最も接近できた蘭学者が蘭書や漢籍などをもとにどのように国際関係を把握したか、そこでは日本はどのように位置づけられることになったか、また、日本の漢学者が漢詩を通じて中国に発信しようとしたものは何だったのか、またその背景にはどのような中国認識があったのか。このような問題から、従来「鎖国」期とされているこの時代に、わずかに開かれた窓から海外との知的交流をめざした知識人の営為が見えてきます。

要 旨

第1報告 「小中華」から「半開」へ—蘭学者の自他認識

鳥井裕美子
大分大学教授

御紹介にあずかりました大分大学の鳥井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。きょうお配りしたレジュメはかなり詰まっているものですから、所々省略するかもしれませんが、ほぼこのとおりに話を進めさせていただきます。私の専門は蘭学です。そもそもなぜ蘭学を勉強しようと思ったかといえば、若いころになぜ日本は明治以降あのようになったんだろうと思って、蘭学を勉強すれば近世から近代への移行が少しわかるようになるのではないかというのがきっかけで、それ以来ずっと研究をしています。

1. 「鎖国」時代の海外知識の情報源

江戸時代、やはり（蘭学者が）世界を一番知っていた人々だったということは言えると思います。きょうは「蘭学者の自他認識」ということで『小中華』から『半開』へと題しました。江戸時代は、1640年代以降いわゆる「鎖国」政策がとられ、日本人は海外渡航が禁止されます。それで、世界の情報を自ら出かけて行って仕入れるわけにはいなくなり、（その情報源は）次の6つにほぼ限られてきます。

①舶載書籍（漢籍・蘭書）や地図は、少し古いものであっても確実に広範な基礎知識を提供しました。もちろん漢籍は日本人の多くが読めましたが、蘭書が読めたのは

蘭学者だけということで、蘭学者にとっては重要な情報源です。

②和蘭風説書・唐風説書は、オランダ船や唐船が長崎に入港したときにもたらすので、ヨーロッパに関していえば、1年遅れの当時としては最新のニュースです。書籍に比べてホットだというメリットはあります。

唐風説書は唐船がもたらしますから、範囲がほぼ東アジア全域です。ただし、その唐船の船主の周辺で得られたような情報もたらされる。明が清に代わり、それを「華夷変態」といって日本側は随分衝撃を受けましたが、1640年代に明が滅びて清に代わり、しばらく明末清初の動乱がある。そのころの情報が一番充実しているのは、この唐風説書です。後に蘭学者もこれを読むことができました。

和蘭風説書は江戸時代初期から幕末まで、アヘン戦争以降は別段風説書という非常に詳しい形のものも添えて、世界情勢を日本に伝えました。これは本来機密文書ですが、それを写して、日本じゅうの学者や知識人、蘭学者だけではなく儒者も国学者も読んで、ある程度の世界情勢を知ったということで、この①と②は、海外知識の情報源としては学問的に重要なものだと言えます。

その他に③漂流民・潜入異国人、④オランダ商館長・蘭館付医師、⑤朝鮮使節・琉球使節・ロシア人。たまたま漂流民が帰ってくれば、貴重な体験談が得られる。潜入異国人は、例えばシドッチのような場合です。これは新井白石の「西洋紀聞」を生みました。また、オランダ商館長や出島の蘭館付医師から得る学術情報は、蘭学にとって重大な意味を持ちましたし、朝鮮使節・琉球使節、定期的ではありませんがロシア人、彼らの情報も無視できません。知識人はこういうものに非常に敏感に反応して情報を収集していました。

⑥の輸入品は、生きた動物や植物も含まれますが、庶民の海外への好奇心を刺激したばかりか、知識人の認識にも影響を及ぼしました。

2. 天主教系漢籍（世界地理書）・地図の影響

江戸の初期、海外事情の基本図書の役割を担ったのは天主教系漢籍で、いずれも17世紀に中国で刊行されたものです。天主教系というのはイエズス会士の著書で、①利瑪竇（Matteo Ricci 1552-1610）と②艾儒略（Giulio Aleni 1582-1649）はイタリア人。③南懷仁（Ferdinand Verbiest 1623-1688）はフランドル、今でいえばベルギー人です。天文学が得意であったり、地理学に秀でていたり、それぞれ得意分野がありました。

利瑪竇（マテオ・リッチ）の「坤輿万国全図」（1602年、北京刊）は、中国が中心の楕円形の世界図で、大航海時代以降のヨーロッパにおける知識の集積がほぼ反映されたものと言われています。南方にある巨大な大陸は未知の大陸で、マゼランから名

前を取ってメガラニカといいます。日本では、知識人は江戸の中期まで、庶民の場合は幕末まで、この利瑪竇の地図に非常に影響を受けました。楕円形の中に世界図、その中心に北京があるので、当然日本も中心に入る、そこが好みに合ったのでしょう。

幕末の1850年頃、庶民の間でよく売れた木版の世界図「地球万国山海輿地全図説」「万国人物の図」なども、基本型は同じです。本当はもう18世紀後半の蘭書地理書による知識でオーストラリアは知られていたのですが、ここでは相変わらず楕円形の世界図の南方にメガラニカがあります。また、女人国（女性だけの国）とか小人国とか、リッチ系世界図の古い知識が、そのまま残っています。それほど利瑪竇の影響が大きかった。

続いて艾儒略の『職方外紀』（1623刊）と南懷仁の『坤輿図説』（1672刊）。これらは地理書で、一時期は幕府のキリスト教禁制の中で禁書扱いされ、またそれが緩められたりで、これも意外に多く日本各地に残っています。この中には世界の七不思議の話とか非常に面白い話も含まれているので、知識人から庶民まで読み継がれました。新井白石・前野良沢・山村才助・長久保赤水ら多くの儒者・蘭学者に単独または蘭書と併用で200年以上利用されています。

そして、この影響を受けて出版された最初の世界地理書が、長崎の町人、西川如見の『増補華夷通商考』（1708刊）です。五大州の知識がありますから、この書物には当然アジア州のことも書かれています。日本で古くから長く伝えられてきた、世界は本朝（日本）・震旦（中国）・天竺（インド）からなるという三国世界観が、この本が庶民レベルまで読まれたことで、以後天竺が後退した、と多くの研究者が言っています。その代わりに、本朝（神国日本）、中華十五省+外国（朝鮮・琉球・大宛・東京・交趾）というのが1つのまとめ、そして外夷（横文字の国…阿蘭陀ほか46カ国）が、大きな枠の三国世界観となりました。本朝と漢文の国と横文字の国です。

この『増補華夷通商考』より少し前の庶民の世界観を示すものとして『世界人形図』（1650刊）を紹介します。5×8で40ある枠の最上段に日本・大明・高麗・韃靼が、2段目に台湾・ジャワ・スマトラなどの人物がいて、中央部分にはヨーロッパ、アフリカの国々の人物、左の下段には「小人」と「長人」という空想の存在も含まれています。1650年代に、世界の国40の名前と人物の特徴をある程度知っていた。それ以上に『増補華夷通商考』は詳しい。どんな産物があって、どんな人たちがいるのか。その中のジャワに関するところは最後に取り上げたいと思います。

3. 蘭学者の自他認識（18世紀後半～19世紀前半）

（1）勃興期の蘭学者の「小中華」思想 —医学・自然科学分野

1720年に徳川将軍吉宗が禁書の緩和令を出します。それにより、天主教系漢籍のキリスト教以外のものがまた入ってきて使えるようになります。それと、オランダ語能力ですが、出島にオランダ人が閉じ込められてから、実は18世紀の初めまで、少なくとも17世紀の終わりまでコミュニケーションはポルトガル語でした。オランダ通詞という名前の人たちはいましたが、そのうちの一部はポルトガル通辞だった人たちです。まだ日本人のオランダ語能力が非常に低くてコミュニケーションがうまくいかない。それで、昔からいたポルトガル通辞がポルトガル語のわかるオランダ人たちと貿易上のコミュニケーションをとっていたということです。

長崎のオランダ通詞の能力が高まるのは、18世紀に入ってからです。それでもそれは長崎だけの話で、18世紀の後半、一番有名なものが『解体新書』の刊行で、これは1774年ですが、この30～40年前に長崎ではオランダ通詞の中に優れた学者が出てきています。ですから、蘭学の初めを『解体新書』からとする教科書が今でも多いのですが、最近では長崎のオランダ通詞が蘭学を始めたとする説もあります。それは18世紀の前半です。

ただ、きょうのお話「認識」ということになると、そういうレベルの資料は18世紀前半は見当たらなかったもので、蘭学の代表的な成果である『解体新書』に関するお話しをします。18世紀中葉～後半は、蘭学の歴史の中では勃興期に当たります。その蘭学者が、西洋の医学、そして銅版画の精密さに惹かれて、無理をして訳し、とうとう刊行したのが『解体新書』です。

その『解体新書』を訳した杉田玄白と前野良沢の場合、それまで自分たちが勉強してきた漢方医学に対してどのように言っているのでしょうか。杉田玄白という医者は、若いころはもちろん漢学を学んで漢方医でしたが、あるときからオランダの医学、その中でも特に外科学が非常に優れていることを認識して、『解体新書』を出版したわけです。翻訳は漢学の知識がなければできません。漢語を使うけれども、例えば『解体新書』の「解体」という言葉を「解剖」の意味で使ったのは初めてだと言われています。それ以外にも、漢方の概念や言葉には全くなかった人体の用語を漢字で造ったので、いま私たちが使っている頭蓋骨、軟骨、十二指腸などたくさんの言葉はここで生まれました。

『解体新書』で彼が非常に日本を意識したことがわかるのは、解剖の意味であえて「解体」という言葉を使ったことが1つですが、冒頭の巻之一に「日本」ということを言っています。当時、普通は若狭とか自分の藩の名前を書くだけですが、彼がなぜ日本の杉田玄白ということ強調したかという、いずれこの『解体新書』は支那に

渡ることがあり得ると彼は妄想したんです。支那の医者に読ませたい。そのことを自分で『和蘭医事問答』という本に書いています。

「訳に三等あり。一に曰く翻訳、二に曰く義訳、三に曰く直訳」。『解体新書』の凡例にみえる翻訳方法は3種類で、漢語を当てはめるか、意味を取って造語するか、音訳するかだと言います。さらに、「この書の直訳する所の文字は、皆漢人の訳す所の西洋諸国の地名を取りて」と書いてあります。これはさきほどの利瑪竇の世界図を指します。いずれにしても、漢語は中国の古典やイエズス会士のを借りて、どうしてもないところだけは工夫して作ったということです。ですから、大きく漢語に依存しながらも、漢方是否定しようとしたと言えると思います。

杉田玄白は西洋医学（外科）の漢方に対する優位性に自信を持っていましたが、晩年になって反省します。昔はちょっと言い過ぎたけれど、読み直してみると漢方の外科もなかなかいいものだと言うようになるのです。

前野良沢は『管蠡秘言』（1777 成立）で、西洋の自然科学に対し、陰陽五行説を強烈に批判しています。そして杉田玄白・前野良沢の弟子の大槻玄沢も、和蘭外科の療術は支那の説より優秀だと主張し、「腐儒・庸医、天地世界ノ大ナル所以ヲ知ラズ。妄リニ支那ノ諸説ニ眩惑シ、彼ニ倣テ中国ト唱へ、或ハ中華ノ道ト称スルハ差ヘリ」というように、似たような表現は幾つもしていますが、中華とか支那ということで有難がる腐った儒者とやぶ医者が多いのはおかしいと『蘭学階梯』（1788 刊）で言っています。この時期はまだまだ漢方医や儒者の人数のほうが圧倒的に多かったこともあり、ことさらに西洋の優秀性をアピールしました。しかし特に杉田玄白と大槻玄沢は、漢学の素養を誇り、オランダ語のみに秀でた長崎通詞を「舌人」「口舌之徒」と呼んで蔑視したのです。

（2）対外関係の緊張と蘭学の普及

その後、蘭学がだんだん発展していき、19世紀の初めになると、対外関係の危機を迎えるようになります。ナポレオン戦争の余波によるイギリスのジャワ支配、それに伴うオランダ船の不着、レザノフの来航、フェートン号事件などで、西洋の脅威に関心が集中し、蘭学者が幕府に次々に登用されるようになります。蘭学の普及・蘭書翻訳の隆盛をみるとともに、英語、フランス語の学習も始まりました。西洋に対する関心が非常に強くなって、相対的に中国への関心は後退する。

この時期もう一つ重要なのは、「鎖国」という日本語が生まれたことです。志筑忠雄という長崎の通詞だった人が、ドイツ人ケンペルの『日本誌』を、実は100年前の本ですが、この時期、ロシアの南下など対外的な危機感から初めて翻訳して、『鎖国論』（1801 成立）と題しました。「鎖国」の誕生です。世界的視野で神国日本の特殊性・優越性を論じ、西洋諸国のアジア進出と植民地支配にも言及したこの本は、写本

で流布，特に幕末の攘夷論者への思想的影響は甚大でした。植民というのはオランダ語で *volksplanting*，民を植えるということで，「植民」という日本語もここで生まれました。

(3) 「ゼオガラヒー」ほか蘭書地理書の影響

19世紀に対外的な緊張が高まり，蘭書の役割が重視されるようになると，蘭書により世界の知識を得る人が増えてきます。その中でも最も使われたのが，「ゼオガラヒー」と言われる，ドイツ人ヒュブネル (J. Hübner) の世界地理書で，4冊本，6冊本，1冊本と様々なものが舶載されました。そして『印度志』『亜細亜諸島志』『百兒西志』『輿地誌略』『亜細亜地誌』等，翻訳が沢山生まれ，国学者・儒者・蘭学者といった幅広い層が活用しました。蘭学者の間では，もう利瑪竇系の世界図から離れて，双円図といって丸いところに世界が入っている，蘭書から入った新しい世界像がごく普通になってきます。

4. 蘭学者の自他認識 (19世紀中葉～)

(1) 渡邊登 (崋山, 1793-1841) の文明論

19世紀の中葉になると，蘭学が普及して，蘭学塾に日本各地から沢山の若者が集まってオランダ語を勉強するようになります。オランダ語だけが西洋の進んだ技術や知識を学べる言語ということで，普及した反面，あまりにも日本人の多くが世界の情勢を知り過ぎることに対して，今度は幕府が危機感を持ち，そのターゲットにされた人が何人か出ます。その一人が渡邊崋山です。

渡邊崋山は，田原藩家老として，海防を目的に世界情勢を研究しましたが，実はオランダ語はできません。そばに高野長英，小関三英といった優秀な蘭学者を置いて，翻訳をさせ，当時は西洋諸国について最も正確で広範な知識を持っていると高い評価をされました。今でもそう言われています。しかし，それだけに目立って，幕府から幕政批判ということで逮捕され，結局自殺してしまいます。彼の場合，文明の発生と進歩の基本的要因は「教学」と「物理ノ学」だとします（「外国事情書」「西洋事情書」「慎機論」）。その「物理ノ学」は，私たちが考える物理学ではなく，「窮理」の精神をも意味しました。そこには社会制度も含まれます。中国や印度の世界観に対して「皆空疎・無稽之識」（みんな空疎で無稽だ）とかなり批判していますが，彼が一番批判したかったのは日本です。

彼が捕まった「蛮社の獄」（1839年）以降，幕府の蘭学取り締まりが強化されます。アヘン戦争は日本人にとっても大変な衝撃でしたから，アヘン戦争後，今度はプロテスタント系の漢籍，代表としては『海国図誌』という世界地誌が大量に日本にもたら

されます。蘭学者に限らず多くの幕末の知識人は、『海国図誌』を読んで世界情勢や列強のアジア進出についての知識を深めていきました。

(2) 福澤諭吉(1835-1901)の文明論—日本と支那は「半開の国」

福澤諭吉は、普通は洋学者と言われますが、もともとは蘭学者です。10代の頃からオランダ語を勉強し、蘭書の翻訳もしています。そして、大坂の蘭学塾である適塾では、塾頭も務めました。それがあるときから英学に転換したということです。彼の文明論はあまりにも有名ですが、若い頃から漢籍を読み、蘭学者の訳した本や蘭書から沢山の知識を得て、世界を知り、幕末には自分自身2回もヨーロッパやアメリカに出かけて行きます。そして明治2年以降、次々に啓蒙的な本を書いたのは御承知のとおりです。

その中で、特に明治2年(1869)刊行の『掌中万国一覽』では、世界を混沌・蛮野・未開・開化文明の4つに分類し、支那・土耳格(トルコ)・ペルシャを「未開」の中に入れていいます。そして、『文明論之概略』(1874頃)になると、「今、世界の文明を論ずるに、^{ヨーロッパ}欧羅巴諸国並に^{アメリカ}亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、^{トルコ}土耳其、^{アジア}支那、^{日本}日本等、^{はんかい}亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、^{アヒリカ}阿非利加及び^{オーストラリア}澳太利亚等を目して野蛮の国と云ひ、…」と、トルコ、支那、日本など、亜細亜の諸国はすべて「半開の国」というレベルに入れていいます。これは他の著作にも何度も繰り返されます。「半開の国」という表現で、日本は西洋文明を目指さなければいけないと主張したわけです。

福澤諭吉のような批判も多い人の場合は気を付けて扱わないといけませんが、西洋文明の精神の摂取を強調したところ、文明の精神を摂取することで一身が独立して一国が独立する、そういう点は渡辺崋山とかなり近い。これは、崋山研究で名高い、洋学史の佐藤昌介先生の説でもあります。

5. 蘭学者の東南アジア認識 — ジャワとその周辺を例として —

(1) 地理書

これまで幕末から明治の初めまでを大急ぎで見てきましたが、色々な情報源を使って、例えば東南アジアをどのように見ていたのか。ジャワとその周辺を例にして幾つか資料を用意しました。

まず『職方外紀』から、蘇門答刺(スマトラ、一名シュモダラ)と瓜哇(ジャワ)の項目です。蘇門答刺(スマトラ)では「其地産金甚多。向称金島亦産銅鉄錫及諸色染料。有大山。有油泉可取為油。多沈香龍腦金銀香椒桂」と、豊かな産物を列挙し、人物は「人強健習武恒與敵国相攻殺多海獸海魚」と、猛々しい一方で、あまり働か

ず、琵琶を弾いて遊ぶばかりだと述べています。瓜哇（ジャワ）でも、「多象無馬騾。僅産香料蘇木象牙之属。…」と述べてから、人物については邪悪で妖術を好むと書いています。この『職方外紀』の著者はヨーロッパ人ですが、非常に差別的な表現と思われるものがよくあります。漢文なので、多くの日本人が読んだことは確実です。

そして、西川如見の『増補華夷通商考』（1708刊）。これは庶民レベルでこの時期非常によく売れた本ですが、オランダ東インド会社の根拠地バタヴィアことカラッパ（ジャガタラ）では、「人物甚賤く色黒し。常に裸也」。「土産」つまり産物は沈香・乳香・没薬・紫檀・白檀等々、非常に豊富だと。瓜哇（ジャワ）も「人物シヤム人に似て甚賤し。但し身体に小紋からくさの如くなる入墨あり。面色甚黒し」としたうえで、蘇木・椰子・龍腦・沈香・丁子・胡椒等々の「土産」があることを紹介しています。東南アジアの国の記述は殆ど同じパターンです。

次が、森島中良の『紅毛雑話』（1787刊）です。これは当時のベストセラーで、庶民まで非常に面白がって読んだものです。森島中良は、将軍家侍医桂川甫周の弟で、大名・学者・文人からオランダ人まで非常に幅広い人脈を持ち、蘭書・漢籍・輸入品など確かな情報源を活用しました。彼は戯作者として世に知られていますから、国文学の方は御存じでしょう。『紅毛雑話』巻一に「黒坊」という項目があります。「黒坊」というのはジャガタラ・ベンガル・マレー等の「土人」で、オランダ人の奴隷として出島でも生活していました。「性あくまで愚にして、強力の者もあり、常に飯と肴を喰ふ、豕をば決して食せず、鶏なども自ら殺して、引導をわたしたる物にあらざれば食はず」と、豚は決して食べないとか、イスラムの風習の一部が記されています。また人が騒ぎ立てると「ヤガンマーイマーイ」と言って制するのが、日本語の「やかましい」の語源ではないかと大槻玄沢が語ったという話、「鼻帯」の項で、黒坊がたいてい鼻が低いのは、それを悦ぶためで、幼い時に鼻を押し平め、革紐で縛る風習があること、「黒坊手拭」では、頭を包む風呂敷のようなものを「サブターガン」、布の染め方を「バテッキ」ということなどが紹介されています。

次が、青地林宗の『輿地誌略』（1826?）という「ゼオガラヒー」の抄訳です。青地林宗は幕府の蕃書和解御用に出仕した蘭学者・蘭方医で、「ゼオガラヒー」は、多くの蘭学者がバイブルのように使った蘭書地理書の代表です。ですから、これはヨーロッパ人のアジア観ということになります。蘇門答刺（スマトラ）の「土人」は2種で、「総て色黒形醜、其性怠惰放傲狼戾、和親し難し、……其人兇暴なる、敵を殺し、其人肉を鹽或は胡椒を擦して之を喫ふあり」と、その人たちが凶暴で、人を殺して人肉に塩または胡椒を付けて食べる、そして言語はマレー語だというようなことが書いてあります。瓜哇（ジャワ）に関しても、「土人は支那に原づく者と見、体強健色茶褐、顔面平潤、眼目小細なり、其性行は覬愉苟且、傲慢信なく、狼戾親愛少し、馬哈獸、協乙鄧の二教を行ふ」、その性行は分不相応な望みを持ち、傲慢で心が狼のよ

うにねじれている、とひどいことが書いてあります。「馬哈獸（マゴメタン）、協乙鄧（ヘイデン）の二教を行ふ」というのは、イスラムと、協乙鄧というのはもともと異教という意味ですが、江戸時代はたいていの場合、仏教の意味で使っていました。

箕作省吾訳の『坤輿図識』5巻3冊（1845刊）は、幕末のベストセラーです。箕作省吾は、幕末の代表的な蘭学者箕作阮甫の女婿で、若くして世を去るのですが、これは25歳の時の翻訳です。蘭書数種、ゼオガラヒー、プリンセン、ニウウエンホイスほか、ゼオガラヒー以外はわりあい新しい情報源を引用していますが、彼の基礎はやはり漢籍・漢文です。巻之一は亜細亜州総説で始まっています。蘭書からの翻訳ですと、普通はアジアが後のほうに来るのですが、まず亜細亜州総説を書いて、日本を皇国とし、属国に野作（エゾ）、八丈、琉球、奥蝦夷、薩哈連（サガレン）を置く。蘭書にはこう書かれていないはずですが。これについては彼の国粋性の表れだとされていますが、まだ詳しい研究はありません。しかし、とてもよく売れたということは知られています。この本の売れ行きが良くて、箕作家が潤ったというのです。この『坤輿図識』を読んだ人としては、例えば井伊直弼、吉田松陰、桂太郎、鍋島齊正などがわかっています。『坤輿図識』の「蘇門答刺（スマトラ）」のところには、やはり先程と同じように、人を殺して肉に胡椒を擦り込んでこれを食べる、と書いてあります。同じ知識が再生産、継承されている例といえます。

この『坤輿図識』が、知識人はもちろん、庶民のレベルにも影響が及んだことを示す例をひとつご紹介します。1857年に出版された『萬国一覽』です。相撲の番付に倣って世界の国々の力の強さを、人口の多い順、そのほかの要素を合わせて、ランク付けしたものです。勸進元は大日本五畿七道（日本）で、琉球・八丈・無人島、蝦夷・薩哈連が属国になっています。これはまさに『坤輿図識』の知識が普及したものでしょう。『坤輿図識』の出版後12年たっています。行司はオランダ、年寄が中国（満清十八省）、そして東の大関はロシア、当時はまだ横綱がありませんから、大関が最高位です。西の大関はイギリス。今見てきたジャワなどはどこにあるかということ、ボルネオが西前頭十一枚目、スマトラが十二枚目、セレベスが十六枚目というようなことで、しかし一応出ています。このような番付は、庶民の認識を示すものとして面白いと思います。

（2）和蘭風説書にみる19世紀のジャワ情報

今度は地理書ではなく、和蘭風説書からジャワ情報の例を挙げましょう。1828年の風説書に、ジャワで一揆が起きたという記述があります。そしてその翌年、1829年に「去年申上候通、瓜哇国一揆に付既に咬啗吧奉行職之者出張仕候得共、瓜哇国之首長デイノホノゴロと申者、悪心増長仕相談不申候故攻取申處、餘多人命を断候儀相厭、多勢を以数日取圍候處、同類之者共……」、これはディポネゴロの反乱（1825 -

30年に起きた反オランダ闘争) のことです。ただそれを、変な奴が悪いことをしたというようにしか書いていません。そして翌年の1830年になると、もうジャワの一揆は治まりましたということで、それでおしまいです。これだけではディポネゴロという人物、この騒動の意味などは全然わかりません。1830年の風説書には、ゼネラル(総督)が交代し、新しい総督はバンデンホスという人だとも書いてあります。有名な強制栽培制度を導入したファン・デン・ボスのことです。このように、風説書には新しい情報が盛り込まれてはいますが、背景や説明が不十分で、これだけでは状況が理解できないと思います。いずれにしても、東南アジアの地理知識やこのような国際情勢のニュースは、江戸時代、かなりの量もたらされ、広まった、ということは間違いありません。

おわりに

全体を総括すると、一つ言えるのは、蘭学者のアジア認識は、情報源が漢籍から欧文の蘭書に単純に移行したわけではないということです。最後の最後まで、蘭書も使いますが、やはり漢訳洋書の影響力は非常に大きかった。そして、何より漢文の力が重要です。蘭学者といっても蘭書が自由に読める人はそれほどいませんでしたが、みんな漢文ならば読めるし、翻訳の際、漢文の能力が低ければ翻訳ができない。

今日のテーマは「『小中華』から『半開』へ」としましたが、これも単純に移行したわけではなく、「半開」という意識は持っても、現実の中国に対しては、自分はまだ「小中華」だという意識はずっと残っていたと考えられます。現実の中国ではなくて、自分たちの「内なる中国」、要するに漢文とか漢学の世界は日本人の中で不動の地位を占めていたのではないか。少なくとも江戸時代、そして明治ぐらまではそう言えるのではないか。西洋の衣はまともでも、やはり漢文。これは蘭学の資料をずっと見ていて本当に感じます。

「日本は神国だ、皇国だ」というような日本特殊論は、1801年に「鎖国」という言葉が生まれてから現在に至るまで非常に日本人にアピールするのですが、このような日本人の小中華的な自意識は相当根深いものがある。ですから、建前としては西洋崇拜、もちろん本音かもしれないが、そうであっても、中心部にはまだまだ小中華的な、日本神国思想のような内向きの独善的なものが残っていたし、残っている。江戸時代に関してもそれは色々な資料から察することができます。

アヘン戦争が終わった時、大変な衝撃を受けたことからわかるように、日本人にとって、中国は終始気になる存在でした。輸入品の唐物を珍重し、漢詩を楽しみ、中国の文化、文物には強い興味を持ち続けながらも、政治的な関心の対象からは徐々に後退していったということが、情報源とその成果からある程度言えるかと思います。